

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月18日現在

機関番号：32647

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530966

研究課題名（和文） 芸術的意味を創出する造形ワークショップに関する日米比較と基礎研究

研究課題名（英文） Base Study: Comparison of Art Workshops in America and Japan

研究代表者

押元 信幸 (OSHIMOTO NOBUYUKI)

東京家政大学・家政学部・准教授

研究者番号：40521505

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、造形ワークショップの教育・指導プログラムを「アウトリーチ活動」（学校における文化・芸術の普及活動）することにより、将来の美術教師養成のシステムを構想するものである。

研究成果の概要（英文）：The goal of this project is to plot the future training program for art educators by promoting cultural and art workshops and provide its educational guidelines.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：造形ワークショップ・美術教育・アートプロジェクト・まちづくり・国際情報交換・コミュニケーション・ものづくり・創造

1. 研究開始当初の背景

学校教育、美術館、地域社会などで行われる子ども対象の造形ワークショップの中では、造形体験としてのワークショップが子どもに芸術的意義・可能性・方法を伝えられる有効的手段として考えられている。元々ワークショップは、1960年代、アメリカの都市の空洞化から、人々の孤立を解消するため、小さな共同体を作る目的で行われてきた。（フィルムアート社+プラクティカ・ネットワーク 2005「アートという戦場—ソーシャルアート入門—」）その後も現代的な課題を学ぶ場

として、1990年代頃から世界中に広がりを見せている。現在、ワークショップは「参加体験型グループ学習」などと言われ、新しい学び方のスタイルとして注目されている（中野民夫 2001「ワークショップ—新しい学びと創造の場—」）。日本において造形ワークショップはアートを媒介としたコミュニケーションの手段として、美術館、地域社会、学校、病院などの場所でさかんに行われている。しかし現在日本で行われているアート系のワークショップは、そのほとんどが手探りで、設計されているのが現状である。そこで

ワークショッププログラムの考案における思考のメカニズムを解明し、具体化することが課題となってきた。

2. 研究の目的

アートプロジェクトや造形ワークショップの数は、近年になり飛躍的に増えつつあり、予想を上回る勢いで社会に浸透している。しかし、それは社会教育として広まりを見せながら、必ずしも教育方法として確立されているとは言い難い現状である。その理由は教育的実践としての意義を測りづらいことにあり、一般には一過性の活動としてとらえられ持続性のある学びとして認知されていないことにある。

本研究の目的は、芸術的意味を創出する造形ワークショップの教育・指導プログラムを考察することであり、日米の造形ワークショップの比較と造形ワークショップの「アウトリーチ活動」により、より質の高いワークショップ型の美術授業を展開できる将来の教師養成のシステムを構想するものである。

3. 研究の方法

本研究では、3つの大きな柱を中心に研究を進める。第1は、アメリカ在住の協力者とともにアメリカの造形ワークショップやアートプロジェクトに関する情報収集を行い、調査する質的研究である。第2は、造形ワークショップの事例を取材し、現在の造形ワークショップの状況を広く分析・検証する量的研究である。第3は、大学の授業やアートプロジェクト等での造形ワークショップの実践的研究を行い、造形ワークショップをアウトリーチ活動するものである。以上の3本柱の研究方法をもとに研究実施計画をたて、研究代表者と研究分担者それぞれに研究活動を進めた。

(3本柱の研究方法)

(1) 日米の造形ワークショップの文化比較

- a. 米国の造形ワークショップのフィールド調査
- b. 日本における造形ワークショップへのフィードバック

(2) 日本の造形ワークショッププログラムの検証

- a. 造形ワークショップにおけるこどもの学びの分類
- b. 環境・まちづくり等と造形ワークショップの関わり方について
- c. ファシリテーターの役割と関わり方について

(3) 造形ワークショップの「アウトリーチ活動」としての実践

- a. 教員養成大学における教育プログラム

としての造形ワークショップのアウトリーチ活動

- b. 美術館、地域社会、学校、病院等での造形ワークショップの実践
- c. 学会、講演会等での発表による造形ワークショップのアウトリーチ活動

4. 研究成果

研究代表者と研究分担者は、ワークショップがいかにかに子どもに芸術的意味を創出しているかに関しての考察として、子ども対象ワークショップの考案におけるメカニズムの解明とモデル化に関する基礎研究を実施し、学会発表や講演会等で造形ワークショップについてのアウトリーチ活動を行ってきた。しかし、研究が進むにつれて新たな研究要素が浮き彫りになってきた。例えば、その一つが医療と福祉の現場でどのように造形ワークショップが関われるかということであり(美術と福祉とワークショップ, 高橋陽一, 2011)、また一つは地域とアートを結びつける地域連携としてのアートプロジェクトと造形ワークショップの役割についてである(「上鰻池名画館」におけるアートプロジェクトの波及性, 大成哲雄, 2010)。日米比較では、地域の歴史的、文化的相違が造形ワークショップの成り立ちにどのように関わっているかを、造形教育の国際比較という大きな枠組みへの拡大的変更を持って、考察すべきだと考えられた(驚くべき学びの世界～レッジョ・エミリアの幼児教育～, 佐藤学, 2011)。

これまで我々の行ってきたアートプロジェクトや造形ワークショップの研究を修正しつつ、継続的にアウトリーチ活動を実施することで、日本の造形ワークショップが一過性の活動ではない持続性のある「学びと創造の場」として、より多くの人にその教育的意義が認知されるものと考えられる。

3本柱の研究方法をもとに、ワークショップ型の美術教師養成のシステムの構想を加えた研究実施計画の四項目に基づいて、それぞれに研究活動を進めた。主な内容と成果については以下の通りである。

(1) 日本とアメリカの造形ワークショップの文化比較

22年3月に押元が渡米し、ボーリンググリーン州立大学美術教育専攻ロザリー・ポリッキ准教授より本研究についてのアドバイスを頂いた。それらの事柄について、研究協力者である同大学講師小野寺と内容を検討し、米国の造形ワークショップに関する情報収集した。①美術館によるアート教室の活動を調査 ②専門誌によるアメリカの児童向け美術教育、特に造形に関する方向性を調査

③参考資料（専門誌や図書など）の収集

23年はアメリカの美術教育専門誌、図書などを収集し、美術教育の方向性、具体的な事例などを調査した。アメリカでは、特定の技術を短期間に学ぶものから、児童向けの特別な美術教育、または研究発表、討論会などもワークショップと呼ばれ、この言葉が幅広い意味で使われている事が伺えた。夏には協力者である小野寺が、クリーブランド美術館（オハイオ州）の児童向けアートワークショップ、ピーターズバレークラフトセンター（ニュージージーランド州）の技術習得型のジャパニーズラッピングワークショップ、スクラップフォーアート（オハイオ州）の技術習得、啓蒙型ワークショップを訪れ、講師へのインタビュー、写真撮影などを行った。12月に小野寺が来日した際、押元、三澤、大成にその具体的な報告が行われ、研究報告書の具体的な方向性を確認した。

(2)日本の造形ワークショッププログラムの検証

ワークショップ研究会を21年12月22日に行い、実践者やオブザーバ参加した図画工作・美術の教科調査官との議論を深めた。また、分担者である三澤がコメンテーターのシンポジウム「ワークショップとは？ ファシリテーションとは？」22年2月11日に参加し、永年にわたり日本のワークショップを先導してこられた4名のパネリストの報告を収集した。

今日ワークショップは様々な分野で使われる言葉となったが、特に造形分野におけるワークショップの系譜は、美術館の教育普及活動によって広がった点の特筆できる。1980年代に模索されはじめた美術館でのワークショップは、それぞれの館で学芸員が手探りで始めている。中には演劇ワークショップの系譜を汲んだ手法を用いたり、また、ワークショップと呼ばれる以前の「講習」と呼ばれた形式を取ったりするものも多いスタートであった。また、相談活動から発展したワークショップもあり、そのスタイルは多様と言える。これらが今日にどの様な形でつながり、とりわけ芸術的意味を創出するという点において深化してきたのかと言う研究については、今後さらに調査が必要である。即ち、芸術的意味をどのように定義づけ、それぞれのワークショップ活動に見いだすかにおいて、未だ課題が残っていると云わざるを得ない。

3年間を通し大学美術教育学会では、多くの実践者や参加者との議論により検証を行うことができた。押元は埼玉近代美術館にて「10歳を節目に考える教育普及のありかたを探る」を研究テーマで行われた「アドバイザー会議」に参加し、子ども向けワークシ

ョップについて検証を行った。

(3)造形ワークショップのアウトリーチ活動

分担者である大成がアーティストとして参加した「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2009」の『上鰻池名画館』が、21年7月～9月に行われ、芸術的意味を創出するアートプロジェクト活動を実施した。また、押元、三澤は、大学美術教育学会（21年9月27日）での研究発表などで実践を報告し、造形ワークショップのアウトリーチ活動を行った。22年度は、三澤が5月に川崎市立美術館にて、彫刻ワークショップを実施した。大成は7月に「集まれ！アートパーク」11月に松戸アートラインプロジェクトに大成哲雄＋聖徳大学大成ゼミで活動を行った。押元は12月に「森林公園アートフェスタ 2010」で、造形ワークショップとファシリテーションの体験学習を実施した。三澤が23年7月に香川県中学校美術教育研究会、8月に川口市美術教育研究会にて映像ワークショップを実施。10月には京都市教育委員会と共催で鑑賞ワークショップを開催。3月には東御市の小学校で2つの造形ワークショップを実施。ほか7件実施。また大成は7月に「集まれ！アートパーク」11月に松戸アートラインプロジェクトに大成哲雄＋聖徳大学大成ゼミで活動を行った。押元は8月に「2011スケッチ大会&アートチャレンジ」と10月に「火のアートフェスティバル」[メガとがびアート・プロジェクト 2011]で、鍛冶ワークショップを実施した。

大成は、プロジェクト、ワークショップの活動の中で、参加者が主体的に関わる仕組みを考え実践してきた。そして、活動をリードするファシリテーターの重要性を実感し、趣旨、場所、材料等、状況によって様々なスタイルが生まれていることが見えてきた。今後これらを、分析、分類することで、アートプロジェクト、造形ワークショップの教育プログラムとしての意味をより明らかにしていく方向性が見えた。

(4)ワークショップ型の美術教師養成のシステムの構想

押元は、川口短期大学の総合演習の中で、造形ワークショップの体験などを行った。「森林公園アートフェスタ 2009」（21年11月30日）また、大成は、公開講座で学生と協力して造形ワークショップのアウトリーチ活動を行った。「あそびの天才」（図工のお家をつくらう！）松戸中央公園（21年7月5日）三澤は年間を通じ「ワークショップ実践演習」などを通して、美術教師養成のシステムを構想した活動を行っている。特に、芸術的意味を創出するという点において、参加者

とファシリテーターの関係性が重要視される点と、ファシリテーターのファシリテーション能力により成果に大きな差が出るのが明らかとなり、その要因として、ファシリテーター自身の造形体験の有無が大きく左右する点が見えてきた。今後、造形体験の質と、その内容によるファシリテーション能力の獲得状況の差について調査し、分析する必要があるなど課題が見えてきた。

また、大成は、22年9月の大学美術教育学会でのシンポジウムでパネリストとして実践を報告し、プロジェクト型の美術教師養成のシステムの構想について発表をした。23年9月の大学美術教育学会で、地域と連携したプロジェクト型の教員養成プログラムの実践を分析、発表をした。

三澤は23年9月の大学美術教育学会において、自らが主宰する「旅するムサビプロジェクト」について、「異校種間連携における学生の学びについて」の発表を行い、ワークショップを核とした教員養成の成果と可能性について報告した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

①押元信幸、創造教育としてのワークショップ—模倣を生かしたワークショップの実践から—、川口短期大学紀要、査読有、2010、131-141

②押元信幸、美術教育におけるワークショップの一考察—模倣を生かしたワークショップの実践から—、全国大学造形美術教員養成協議会、査読無し、2010、9-14

③三澤一実、展覧会「ムサビる」における中学校と大学との連携-スクールアートプロジェクトの可能性、全国大学造形美術教員養成協議会、査読無し、2010、15-22

④大成哲雄、「上鰯池名画館」におけるアートプロジェクトの波及性、聖徳大学生涯学習研究所紀要、査読有り、2010、49-55

⑤大成哲雄、「教員養成大学における親子対象アートプロジェクトの可能性～「集まれ！アートパーク 公園改造計画」の実践から～、連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成17～21年度研究集録、査読無し、2010、259-269

⑥三澤一実、旅するムサビが作り出す学生の学び-ワークショップの視点から協働でつくる授業の魅力-、平成22年度大学造形美術教育研究、査読無し、第9号 2011、10-11

⑦三澤一実、学校にアートプロジェクトは必要ない？、教育美術、査読無し、No,822、2011、28-29

⑧三澤一実、自分をつくる美術教育、造形ジャーナル、査読無し、No,411、2011、10-11

〔学会発表〕(計6件)

①押元信幸、創造教育としてのワークショップ—模倣を生かしたワークショップの実践から—、第48回大学美術教育学会高知大会、2009/9/27、ナディアパーク・デザインセンタービル

②三澤一実、展覧会「ムサビる」における中学校と大学との連携-選択教科廃止による今後10年に向けて-、第48回大学美術教育学会高知大会、2009/9/27、ナディアパーク・デザインセンタービル

③大成哲雄、『教員養成大学におけるアートプロジェクトの可能性—「集まれ！アートパーク」の実践から—』、第49回大学美術教育学会東京大会、2010/9/19、武蔵野美術大学

④三澤一実、これからの鑑賞授業のあり方、香川県中学校教育研究会美術部会、2011/7/29、香川県高松市立高松第一中学校

⑤三澤一実、異校種間連携における学生の学びについて、第50回大学美術教育学会宮城大会、2011/9/25、宮城教育大学

⑥大成哲雄、『教員養成大学におけるアートプロジェクトの可能性—「集まれ！アートパーク」の実践から—』、第50回大学美術教育学会宮城大会、2011/9/25、宮城教育大学

〔図書〕(計9件)

①林 信二郎・梅澤 実・押元信幸 他9名)、まなごしの保育理論と実践、ななみ書房、2009、99-108

②藤沢英昭・水島尚喜・(三澤一実)、図画工作・美術教育研究第三版、教育出版、2010、193頁中6頁担当

③共著(大成哲雄)、新美術表現と鑑賞、開隆堂、2010、136-139

④高橋陽一(三澤一実)、造形ワークショップの広がり、武蔵野美術大学出版局、2011、161-178

⑤久保村里正(大成哲雄他27名)、これからの教科教育 図画工作科・美術科、文教大学出版事業部、2011、27-30

⑥久保村里正(押元信幸他27名)、これからの教科教育 図画工作科・美術科、文教大学出版事業部、2011、144-147

⑦三澤一実・押元信幸 共編著、Active Learning 造形ワークショップ・実践例とプログラム開発、カシヨ出版センター、2010、p.6～p.9 p.34～p.35 p.104 p.108～p.109 p.110～p.111

⑧高橋陽一、斉藤啓子、三澤一実、他10名 共著、造形ワークショップの広がり、武蔵野美術大学出版局、2011、161-178

⑨監修：藤沢英昭、柴田和豊、著者(大坪圭

輔、本田貴侶、三澤一実、他 14 名) 共著、
文部科学省検定済教科書中学校美術 1、開隆
堂出版、2011、43 頁中(12 頁担当)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

押元 信幸 (OSHIMOTO NOBUYUKI)
東京家政大学・家政学部・准教授
研究者番号：40521505

(2) 研究分担者

三澤 一実 (MISAWA KAZUMI)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：10348196
大成 哲雄 (OONARI TETUO)
聖徳大学・児童学部・准教授
研究者番号：80406743

(3) 研究協力者

小野寺 和子 (ONODERA MASAKO)
Bowling Green State University・講師